

書籍紹介

家本誠一 著
『傷寒論 訳注』

『傷寒論』の訳注、解説は森田幸門、大塚敬節、藤平健らにより、いわば日本古方派の立場で書かれたものが多い。中医学では劉渡舟による『傷寒論枝注』が有名である。本書の特徴は『素問』、『靈樞』を中心に、『宋版傷寒論』を日本古方派とは異なる経絡、皮肉、筋骨、藏府中心に訳注が記されているところにある。

底本は『傷寒雑病論』三訂版（日本漢方協会学術部／編、東洋学術出版社、2006年4月6日第3刷）と凡例に記されている。目次は刻仲景全書序、傷寒論序、國子監、傷寒卒病論集、傷寒論卷第一～傷寒論卷第十、傷寒論後序で、本文の全部に訳と注がつけられている。難解な傷寒論卷第一の辨脈法、平脈法がわかりやすい訳と注が施されている点は読者にとってはありがたい。本書は昭和60年頃「傷寒論を読む会」を著者が立ち上げ5年間の購読後、さらにもう一度この本の購読を行った講義録を改訂したものである。

著者の思想は、はしがきに「日本の漢方、その主流を作る古方派は、主として処方記されている条文だけを読んで、その運用に専念した。現象論の末梢に拘泥して本体論の追究を放棄した。経験を尊重して理論を軽蔑した。個人の経験が社会

の財産になることは難しい。故に古方派的漢方は百年同意語反復の世界に沈溺しているのである。これでは『傷寒論』は理解できない」と記述され、日本古方派には耳に痛い言葉が述べられている。「太陽病」に対して注では「太陽膀胱経の病である」とはっきり書かれ、経絡を示すことにより病の解剖学的位置がはっきりとわかりやすい。また薬方は帰経説を採用し、薬効について『神農本草経』、『名医別録』が記載されている。傷寒論卷第一の辨脈法、平脈法を平易に解説し、『傷寒論』の三陰三陽の脈状の基盤とし、全文の注の中で繰り返し述べられていることが、管見ながら本書の特徴であると思われる。『傷寒論』に訳注を加える仕事は生涯をかける大変な仕事であり、著者も『傷寒論』は全文を読むべきで、古代漢語と現代医学の知識が必要であると主張しているように、豊富な知識と経験がないとこのような著書を世に送り出すことはできない。教えられることの多い著作であり、御一読をお勧めしたい。

(西巻 明彦)

[緑書房、〒103-0004 東京都中央区東日本橋 2-8-3, TEL. 03 (6833) 0560, 2013年2月, B5判, 780頁, 9,800円+税]

吉元昭治 著
『日本の神話・伝説を歩く』

産婦人科の臨床医としてだけでなく、鍼灸の研究、道教の研究を中心に医史学の広い範囲の研究と発表をしている著者が、日本全国の史跡の地を訪ね発刊された「日本の神話・伝説を歩く」を紹介する。診療の合間に四十七都道府県のすべてに自ら足を運び、多数の写真とともに、神話・伝説の地の現在を教えてください。大冊として、次のよう

に取り纏めてある。掲載史跡については巻末に都道府県ごとに一覧表もつけられている。観光案内では知りえない史跡の来歴に医学史家としての視点が加わり、後学のものにとり、また郷土史に関心のある方にも大変に参考になることが多いと思われる。紹介者が知る史跡は多くないが、それらの史跡の記述を読み、日本の各地方の歴史の重層

を知る楽しみを味わうことができた。

自らの足と眼でたしかめられ、以下の目次のように編集された著者の『日本人の心や生活を伝える伝承地を伝えてゆく』気迫に敬意を表したい。

日本神話の世界へ

神統譜—日本神話のはじまり

伊邪那岐命、伊邪那美命と黄泉の国

月読命

猿田彦

素戔鳴尊と蘇民将来

神功皇后と武内宿禰

隠岐

安曇野

昔話・説話と信仰

浦島太郎

鬼伝説

天狗

鬼門と猿

招き猫

阿倍晴明

蒙古襲来（元寇）

孔子

鶴姫悲話

古代人の息吹をさぐる

土偶

石の遺物

西南諸島

（渡部 幹夫）

〔勉誠出版、〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-10-2、TEL. 03 (5215) 9021、2014年8月、菊版、512頁、4,800円＋税〕

古西義麿 著

『緒方郁蔵伝——幕末蘭学者の生涯——』

緒方郁蔵の生誕二百年記念として、橋本まちかど博物館長・除痘館記念資料室専門委員の古西義麿さんが出版された本書を紹介する。緒方郁蔵は文化十一年（1814）生まれ、明治四年（1871）没の幕末の蘭学者である。適塾に学び緒方洪庵の協力者として多くの医書の翻訳をなした。郁蔵は大戸の姓なるも洪庵の義弟となり緒方を名乗り、独笑軒塾を開き、北の緒方（適塾）、南の緒方（独笑軒塾）と称されたこともあるという。こよなく酒と読書を愛し、西洋医学書の翻訳を多数行った郁蔵が独笑軒塾を開き、塾生に飲酒を禁じた頃の幕末の蘭方医の仕事として残されたものと、その生涯をまとめられた本である。郁蔵は安政元年（1854）にプーチンがヂャナ号にて天保山へ来泊したときには洪庵とともに通訳を務めたという。除痘館にて種痘を広め、土佐藩に招かれるなどの経歴を持ち明治を迎えている。その後大阪医学校での教育にも従事している。大阪医学校に就任したオランダ医官エルメレンスの就任演説が郁

蔵により『開校説』として和訳された全文が資料として本書に収録されている。江戸末期に医学の修行として蘭学を学んだ者の多くは個性が相当に強い方々であったと考えるが、適塾の三蔵の一人として名の残る郁蔵が、緒方竹虎、緒方貞子につながる家系の祖に当たることを識り、郁蔵研究を集成された著者に感謝する。章立てを紹介する。

- 第1章 生い立ち—誕生から適塾入門まで—
- 第2章 独笑軒塾の開塾とその展開
- 第3章 土佐藩の医学・洋学研究と緒方郁蔵
- 第4章 大阪医学校時代
- 第5章 資料

加えて本書には著者の作成された詳細な緒方郁蔵年譜、豊富な参考文献があげられており、この時代を研究するものにとり先行研究を知る大きな手がかりになると考える。

（渡部 幹夫）